

新美南吉の詩集より

Nankichi×Step

南吉の詩は童話に勝るとも劣らず魅力的。
地元を中心に活躍する現代の若手作家たちと詩をコラボレーションしていきます。



汽車〈B〉

北国から来た汽車が
私達の町に
とまった

くさりのように

長い貨車で

皮をひっぺがした材木と

五十サンチの白雪をのせて

清烈な木の香が

はなをつき

一陣の冷気が

肌にしみた

私達は頭をあげて

雪の降りつむ山を思い

木のぶちきられる

音をきいた

耳をつんざく汽笛を

鳴らし、

はげしいシビラントで

蒸気を吐きちらすのは

このなまぬるいヴァルガリテイを

瞋^{しん}患^{いん}するの

よし汽車よ

その気概の白雪をたもち

その怒患のシビラントをつづけ

その情熱の木の香をふらしつつ

更に南へ南へ

疲れた山野をつきつけてゆけ

シビラントシユツシユツという歯擦音
ヴァルガリテイ卑俗なこと
怒患 怒り

鈴木あり

イラストレーター
<http://alisuzuki.com/>

愛知県生まれ。
多摩美術大学グラフィックデザイン科卒。
人物、風景、絵本などが得意です。

絵について

JR半田駅にある半田市鉄道資料館で実際にSLを見学しました。
まるで大きな生き物のようで、魅了されました。

新美南吉



にいみなんきち
(1913-1943)

大正2年7月30日、愛知県知多郡半田町(現・半田市)に生まれる。幼くして母を亡くし、養子に出されるなど寂しい子ども時代を送る。旧制半田中学校卒業後、「赤い鳥」入選を契機に北原白秋や巽聖歌の知遇を得る。昭和18年、結核のため29才で世を去る。

解説

鮮烈で激しさを内に秘めた作品だと思う。北国から私たちの町にやって来た貨物列車は、皮をひっぺがした材木と白雪を乗せている。これを見た人々は、白雪の降り積もる北の山を思い、木のぶち切られる音を聞く。耳をつんざく汽笛を鳴らし、激しく蒸気を吐き散らす汽車は、私たちを取り巻く生ぬるい卑俗な

世界を怒っているのではないかと作者は考えるのだ。その気概と怒患と情熱をもって「更に南へ南へ／疲れた山野をつきつけてゆけ」と汽車に呼びかける作者は、かくありたい、と願う自分の思いをこの汽車に託しているのだろう。日常生活の中で、知らずに身に積もっていき埃がふりまわれるような一作だ。

解説者

前新美南吉記念館館長

矢口 栄 さん

半田市、知多市、東浦町の小学校勤務を経て'04年から'11年まで新美南吉記念館館長を務める。著書「南吉の詩が語る世界」(一粒社出版部)「子どもたちに贈りたい詩」(教育出版センター)「新しい詩の創作指導」(共著・明治図書)ほか。